

(歐洲にて直通するに至れるもの九ヶ國)

開通當初年

七・一通话(日平均)

一九二八年一月

七・七通话(同)

一九二八年二月

一三・六通话(同)

一九二八年三月

二六・〇通话(同)

一九二八年四月六月

三六・五通话(同)

尙西半球に於ける人口並に無線電話による東半球との連絡
電話数を示せば(單位一、〇〇〇)

國名

人口

電話數

合衆國

二二〇、〇〇〇

一八、五〇〇

加奈陀(各地)

九、七〇〇

一、二八〇

政 瑪(同)

三、五〇〇

九五

墨 國

一、三五〇

三〇

尙通話料は最高料金は墨國及諾威オスロ間で距離八千哩に
達し三分間六七弗五〇仙、加州英國間は五七弗、以上一分
間を増す毎に一七弗を徴し、加州瑞典間は最初の三分間は六
三弗五七仙とし以上一分間を増す毎に二一弗五仙を増徴し、
コンネチカッツ州、テラウエヤ州、テイストリクト、オア、コ
ルンビヤ、メーン州、メアリーランド州、マサチエーセツツ
州、ペンシルバニヤ州、ロードアイランド州、紐育、パーモン
ト各地と英國間は最初の三分間四五弗以上、一分間を増す毎
に一五弗を受ける。天候其他により明瞭に聴取不能の場合に
は相當通話時間に對する料金を引去るのである。(國際時報)

質 疑 應 答

○奈良地理學會講演會

奈良地理學會では十一月十

八日奈良女子高等師範學校に東京帝國大學地理學教員出身者
及在學者の盛大な講演會を開催した。講演の題目と講演者は
次の如くであつた。猶ほ山崎博士の内陸流域に關する講話等
があつた。

國際關係の經濟地理的警見

佐々木彦一郎

大井川隆起三角洲

波 邊 光

奈良丘陵附近の地形

帷子二郎

氣候と土地利用

福井英一郎

本邦國內移住について

武見芳二

人口増加と人口過剩

石田龍次郎

湖沼學の歴史及現狀

吉村信吉

市場と都市經濟地理

西水孜郎

鐵道と文化

細井一六

本邦の沈降海岸について

村田貞藏

九州南部に發達する山麓階について

宮崎健三

フィンランドの地形

小川朝吉

白人種の氣候適應

松井勇

人文現象に於ける氣候的因子

河田四郎

質 疑 應 答

問 呼倫貝爾の獨立運動について

大阪T生

答 呼倫貝爾といふと、黑龍江省呼倫縣の首府の名である。

英國製の地圖に Khalar 海拉爾と書いてある。黑龍江省が

露領シベリアと外蒙古車臣汗部との間に凸出してゐる部分に呼倫、鹽濱の二縣がある。東支鐵道は鹽濱即滿洲里驛を起點としこの地域に入る。滿洲里のつきに哈岡、完干烏果諾爾の三驛を置いて海拉爾になる。露國と支那との接合の要會で、呼倫湖と貝爾湖といふ二湖があり、飯馬河及額爾古納河のつくる盆地で、大興安嶺と外蒙古高臺との間を占めてゐる。露領グネルチンスキヤザリオドスキとは地形上最も緊密な關係に置かれてゐて、面積約一萬平方哩、人口約五萬、オロチオンヤアリヤート、ソロン、タホリ等がある、清朝滅亡後外蒙の獨立と同時にこゝも亦獨立を宣言したが、一九一五年十一月露支間に協定成立し、支那中央政府に直屬する特別行政区となり完全に自治を保障された、然るに露國革命以後一九二〇年一月支那政府は徐樹錚氏をして高壓的に此地方の自治を取消さしめ黑龍江省の一部に併合した、従つて同地方民の反感を激成したが、一九二五年十二月、外蒙古共和國成立以來外蒙國民黨及青年革命國民黨が其裏面にあつて、その獨立を煽動した、露國も武器彈藥を供給したそこで最近(八月十六日)青年黨は露國のスピョフスキー將軍を總指揮に仰ぎ、獨立運動を起し外蒙古共和國に合併せんとする陰謀を實行せんとし、同日午前六時東支鐵道の烏果諾爾驛を襲撃し、鐵道二ヶ所を破壊したしかし黑龍江督軍高福麟の出兵によつて間もなく鎮められた。露國の暗中飛躍で二百萬金ルーブルを軍費に出した噂もある。蒙古政府は無關係だと聲明したが、何れにしてもかうした樞要の地域である。滿洲は南方のみに眼をつけてゐてはあかぬ。此の方も監視せねばならぬ。(F)

問 左の文字の異同正否

(臺北 新高生)

答 砒酸—珪酸……砒は俗字、石英の異名は珪石なり、

侵蝕—浸蝕 侵はなかつ、犯也干也冒也侵蝕は敵國などを蚕食する意あり。浸はしゆみこむ。浸蝕は水的作用、新熟語浸潤、浸染などいふ熟語あり。

皺曲—褶曲……皺はしわ、褶はひだ、衣服の折りこみである。地層のは顔面などのしわでなくて、捨などのヒダの方よろしからんか。

走向—層向 走向の方を慣用したし。

礦物—鑛物 カツ、クワツ には礦床學教室、京都は鑛物學教室、といつてゐる。石に従ふ所と金に従ふところがあるのだ。

鑛岩—熔岩 鑛は鑄る也、トカス也、熔は鑛の俗字なりといふ、然れどもラバの漢譯は火

砂漠—沙漠 スパイイ 漠と書くの例なり。

山脉—山脈 脈は脈の俗字。

解答者は○字を以て常用したしと考ふ。しかれどもその他の字が誤用なりといふにはあらず一般の學者が慣用することに於て正しくなるべきものなるべし。(F)